

# 欧洲文化都市ゲルリツツ・ズゴジェレツの文化政策と欧洲文化首都

マティアス・テオドル・フォーケト

Die Kulturpolitik der Europastadt Görlitz-Zgorzelec im Kontext der Kulturhauptstädte Europas  
Matthias Theodor Vogt

ご出席の同僚の皆様、そして日本の文化政策で活動される友人の皆様、日本において文化政策学会を創立するにあたり、私がお話をさせていただくということは大変光栄なことであります。藤野先生が私を呼んでくださいました背景には、「日本の文化政策学会が「日本の文化首都」といった形でのプロジェクトを実施できないだろうか、というような考えをお持ちだったからだと思います。町の文化的な発展において、2010年のヨーロッパ文化首都へ立候補するということが非常に熱意を持って取り組まれたということについてお話をさせていただきたいと考えております。

今日、お話をさせていただけるということは、私を呼んでくださった機関、つまり東京大学が決して1877年にはじめて誕生したのではないということを考えますと、一層大きな名誉です。東京大学は、1635年に幕府の設けた機関の伝統を継承しています。これはヴェネツィアの総督がコンスタンチノープルで1668年から始めました“Giovani di lingua”的教育よりも一世代古いわけで、これによってヨーロッパではオリエント関係のプロフェッショナルが始まったわけでございます。ということは日本はヨーロッパにおけるこうした動きより一世代早くこうした動きが開始されていたということだと思います。大陸の枠を超えて他者から学ぶというのは日本の歴史において常に見られてきました— 例えば1543年にポルトガルから銃が伝わった、あるいは明治維新以降ドレスデンの音楽が強い影響を与えた、などを思い浮かべていただければ分かると思います。そこでは常に外国から学んだことを日本独特の文脈に合わせて、手本となったものをも凌ごうという努力をしてきたわけであります。

30年前にヨーロッパの企業文化、あるいは企業の無文化と言った方がいいのかもしれません、これが軍隊組織から発したために、根本的な悪になっているというような判断をする、批判をするということは、日本の著作家の方々の特権と言いますか、そうした方々が行っていましたが、これに対して、日本は20世紀の50年代以降、江戸時代の組織心理学の伝統を使いまして世界経済の頂点に上り詰めることに成功していったわけであります。この意味で今日、皆様が私をドイツ文化政策協会設立30周年を機に日本にお招きくださいましたように、30年後には、皆様が日本の文化政策学会を設立されて、そのメンバーである皆様をドイツにお招きして、ドイツで皆様から学ぶことができるようになるという風に確信をしております。

逆に、本日のシンポジウムの目的は、皆様とヨーロッパの考え方について議論をし、それを通じて日本文化政策学会が地域文化政策の発展に貢献することを目的としているわけであります。ヨーロッパでここ数十年、もっとも大きな意味をもつたのが、欧洲文化都市 (Europäische Kulturstadt)、これは85年から2004年まではこのようにいいましたが、現在は欧洲文化首都 (Kulturhauptstadt Europas) といわれていますプログラム、欧洲都市ゲルリツツ・ズゴジェレツの文化政策を例にとりまして、そのプログラムを簡単に紹介をしていきたいと思います。そしてお話の最後にこのヨーロッパ・レヴェルでのプログラムがドイツの文化分権主義に役に立ったのかどうかという点についても目を向けていきたいと思います。

ゲルリツツの位置は、図を見ていただくとお判りいただけると思いますけれども、ドレスデンとブロツラフ、ベルリンなどの華やかな大都会に挟まれた侘しい荒地の中にあります。そして左側の上はドレスデンでございまして宮廷教会あるいはお城が

あります。それから手前の下側のところ、これはプロツラフでありまして市庁舎の建物があります。それから奥のほうにはソニーセンターがあるベルリンがあります。この都市に囲まれた広い荒野で狼が吼えている様な場所、それがゲルリッツでありまして、これは兎談ではなくて、ゲルリッツから数キロ離れたところには野生の狼が生息をしています。私はまさにそういうところから来ているわけです。まあ一番簡単にゲルリッツに行こうということになれば、私と一緒にいたん宇宙にいて、宇宙から中部ヨーロッパの真ん中に着陸するというのが、一番手っ取り早いわけです。中部ヨーロッパ、この地図でごらんいただけると思いますが、このドイツ、ポーランド、チェコの三つに挟まれた地域、その真ん中のところ、この3つの国が出会うところのすぐ近く、ここにゲルリッツとズゴジェレツの町があります。これがゲルリッツの市庁舎です。本題に入ります前に、簡単にいろいろな概念規定ということについて知っておいた方がよいのではないかと思います。レザーネインターがあるのでこれでよくお解りいただけると思いますが、これがゲルリッツの市庁舎です。今日のテーマは文化政策であります。文化政策というのは2つの意味内容をもっておりまして、ひとつは文化、そしてもうひとつは政治、政策ということであります。

まず政策、政治という分野をみてみます。この政治という言葉、ボリティークの語源は古代ギリシャのpoly、1つ以上のもの、という言葉であります。ヘラクレitusのpolemos pater pantomと言うその言葉は、普通は“戦争は万物の父”という風に不十分な訳し方をされているのですけれども、むしろ、すべての社会は多種多様で始まって、つまり対立と個々の内容の検証で始まるといった方が良いという風に思います。

日本は1500年の儒教の伝統を持っているわけでありまして、そうしたことから、対立するものが動的に動いて、と動的に表現されるヘラクレitusの政治についての定義が、完璧な社会を求めるヨーロッパよりも容易に理解されるのではないかと思います。ヘラクレitusは、このように言っています。「知らなければならぬ、戦いはすべてにわたって公然と行なわれているのだということを。世の常道は争いであり、万物の生成は争いによるのであって、この常道をはずれることはないと」ということを。これがヘラクレitusが残した『断片』80の内容であります。対立に関するこのような考え方、対立あるいはディスクルス (discors) ということに対する対立する概念いたしましては、調和つまりコンコルディア (concordia) という概念があり、これは打ち解けた、私的な人間関係におけるものであります。アウグスティヌスは『告白』の中で、友人の問柄においては、多様なものが一つの共通の本質となる、e pluribus unumと言っております。

この1776年の引用は、ビーダーマイヤー、シューベルトなどの作品はこのアウグスティヌスの言った言葉を理解しないとかなかなか理解が難しいという風に思いますが、このような形で本来のそのあり方というのを友人関係の中に求めといったわけであります。ハイリス・アウグスト・マルスナーの『合唱』というの、これはソイッタウの出身の音楽家でありますけれども、コンコルディアという風に表されています。引用というのは直接的な文脈から切り離された場合には様々な問題をもたらします。例えば、アウグスティヌスの引用が突然アメリカで使われるような場合にそれが当てはまります。この引用が、1776年にアメリカの議会によって利用されたわけで、ヨーロッパから移住した者達の3つの母国の絆を13の州の和の中に表そうとしたわけです。

ここに、ベンソン・ロッシングの言葉が見えます。これはベンジャミン・フランクリンの提案に基づきます。これは、1776年のもので、アメリカの国璽の表側であります。当時の移民の出身地である6つのヨーロッパの母國、アイルランド、フランスなどですが、それぞれのシンボルで表されております。この6つの母國がひとつにまとまるということがひとつの意味、またアメリカの当時の新しい13の州、ニューヨーク、ニュージャージー、マサチューセッツ等々がひとつにまとまるということも意味しているわけです。これはマルテン・オットー理論の非常に早い段階でのイコノグラフィーであります。これが1782年の大アメリカ刻印というアメリカの国璽に採用されたわけですけれども、その段階では鷲だけが残されており、アウグスティヌスの引用からは遠く離れてしまったわけです。ご覧になっていただけだと思いますが、こちらがアウグスティヌスの引用で、鷲がとっているのは、統一の象徴であります。これはイタリア・ファシズムのシンボルとしてムッソリーニが利用したことでも知られております。そういうことから見ると、イコノグラフィーから見ても非常に興味深いと考えます。統一、コンコルディア、調和というのは、この表側、裏側には議論、ディスクルスというのが当然あったわけであります。ベンジャミン・フランクリンはこの対立を宗教的な表現にしております。その内容は「暴君への反乱は神への奉仕」ということでした。この文章は後に1934年のヒトラーの憲法にはなかったわけであります。ドイツではまず神聖ローマ帝国の時代が続き、1871年から1918年の第一次大戦の終了まで、18年から34年まではワيمアル共和国があり、その後にヒトラーの第三帝国となつたわけであります。その後にはドイツにはもはや帝国と呼ばれるものは存在していません。

もう一度、フランクリンの引用に戻ると、「暴君への反乱は神への奉仕」という考え方は1949年のドイツ基本法の中にまた

反映されております。基本法の第20条に、国の存在についての定義がされておりますが、その第4項に、ある種の引用としてこのフランクリンの言っていることを盛り込んでいます。フランクリンはアメリカの、母国からの独立の正当化のためにこれを言ったのですが、ただ本日私は皆様にドイツの文化政策についてお話をすることと言われているのですが、なぜここで私がアメリカの国璽、引用ということを話しているのかをお話します。このアメリカの国璽の表、裏にあるものは、これは1776年のですけれども、政治の本質というものを表しています。現実の不和と望まれている平和、その対立というものの、そしてそれはともにあるということを示したかったからであります。これがドイツの文化の多様性と関わっています。ヨーロッパというものは文化の多様性を特徴とします。アウグスティヌスの引用は、誤解されていることもありますが、それを正しく理解していただこうと申し上げているわけであります。

ヨーロッパでは統一と多様性という対立がありますが、多様性、これはポリモルフィアというギリシア語から来ています。形式の多様性を意味します。歐州防衛共同体という試みは1950年代の初めに挫折しておりますが、これはフランス議会の反対によるものでした。フランスの議会はヨーロッパの統合を経済の側面に限るべきとしたからであります。結果として生まれたのが歐州統一経済圏でした。この歐州統一経済圏のモットーとして、アウグスティヌスのこの引用、*e pluribus unum*（多数からひとつへ）を使うことができると思います。すでに欧洲では経済の面で大幅に標準化が進んでおります。たとえば、ユーロバレット、輸送コンテナ、あるいはアキ・コミュノテール（EC法の総体系）などがあります。しかし市民は標準化が政治制度に及んでいないということから、まだ不十分であるという風に考えています。政治的な意味、あるいは別な見方をすれば儒教的な意味でも、まだ十分に標準化されてはいないということであります。

ですから、EUは2000年に歐州政治のモットーを作ることで合意しました。これは学生コンクールで決めることになりました。その結果、新しく生まれたラテン語の表現が*In varietate concordia*（多様性における統一）です。この言葉が新しいモットーとなりました。繰り返しますが、様々な形態の中に共通の意味内容を持つということであります。

これは規範として考えられていますが、命令と理解すべきもので、ヨーロッパの国々と人々に対する将来こうした調和の要請を受け入れるようにとの要求なのです。それに対して、歐州政治の現実を客観的に叙述するならば、未だにヘラクレイトスが引き合いに出せるのではないでしょうか。先ほど言ったことですが、争いと必要性を手段として行われているのが政治なのです。文化政策がこのようなこと関係ないと考えるとすれば、それは間違いでしょう。政治の一 分野として文化政策もまた不和の法則に従っています。対立と争いの制御が課題になってくるのであります。

文化政策の第二の要素にお話を進みたいと思います。つまり文化ということです。文化は時間と空間において人間の位置に意味を与える振る舞いです。文化というのはつまり、手続きでありプロセスという意味を持っています。

意味というのはあらかじめあるものではなく、それを求め、見出し、確認しなければならず、その上再び失うこともありうるもので、ゲーテのファウストのモノローグでは、文化適応、エンカルチャレーションのプロセスが、「君が父親から相続したものは、自分のものにするために、獲得せよ」と文化習得の努力として明確に要求されています。反対に、18世紀の日本の格言の中に「親しんど、子棄、孫乞食」というふうにありますのは、経済的次元を超えて獲得をする意欲が世代間で伝達されないとすれば、文化喪失、デカルチャレーションのプロセスを示唆するということになります。

意味とはドイツ語ではもともと技術分野からきた表現です。力が発生する運動の回転方向を意味していまして、時計方向に回るのは順方向、その反対が逆方向であります。人生への根本的な問いとして、どの運動から人生を支える力が生まれるのかという問いなのです。ビクトール E. フランクルは、良心を意味の器官、感覚の器官であると書いています。ニコラス・ルーマンによれば、意味は進化によって得られた成果であって、それも非常に重要な成果だとしています。意味は單なる意味をはるかに超えて、意味したものと意味するものの記号体系なのです。意味は行為に目的を与える目的論なのです。イマヌエル・カントの『人倫の形而上学』における、人間は決して自らの目的実現の手段ではなく、つねに人が目的そのものなのである、という警告を忘れるわけにはいきません。1949年のドイツ基本法の第1条は、このカントの言葉を根本原理として、国家を構築いたしました、少なくとも理論的にはそうなのです。

人生を支える力への問いに与えられた伝統的な解答が宗教です。宗教はこの問題の答えがこの世で作用するためのいわば迫舞台の役割を果す超越的な次元と結びつけるのです。もし宗教がハインリッヒ・ハイネのいうように、国民にとっての阿片ならば、同様に豊かさが宗教にとっての阿片であるともいえるでしょう。いずれにせよ、豊かさが、ファウスト・モノローグでいうところの、「不安は心の奥深くに巢食い、ひそかに痛みを生む」、そしてファウスト第二部の最後に中心的な役割に立ち戻ってくる大きな不安をミニマイズする、しかし解決はしないのですが、ミニマイズする限りにおいてそういえるのです。さらに近年ではユルゲン・ハーバーマスが、後期啓蒙主義とその代弁者たちの宗教に対する懷疑を繰り返し批判的に分析し、2001年10月14日の平和賞受賞記念講演で、今、世俗後の時代が始まった、という風に述べて注目を浴びていま

す。

ところで芸術は今や、時間と空間における人間の位置に意味を与える手段として使われるのであります。秩序構造を芸術作品によって固定化をするということは、芸術本来の課題のひとつで、古代ギリシア悲劇や教会の請負制作芸術、ルネサンス時代、バロック時代を愛した諸侯、今日の映画製作もそのことを物語っています。

もう一つの芸術の力は、少なくとも古代ギリシアの啓蒙にまで遡れます。不正な権力関係とそのひそかな潜入に反対する啓蒙と異議申立てです。権力者たちにとっては、それは転覆を計るものであると認識され、迫害されましたけれども、近代芸術の姿にまさにこの破壊的な要素、役割が決定的影響を与えたのです。芸術は、政治と社会生活を支配している経済に比べると、わずかの力しか持っていないが、影響力は非常に大きいです。というのも、人の生き様に芸術が与える解釈に、それが特定目的のためでないという信頼と信用を社会が与えるからなのです。一元的にグローバル化する消費・社会にあって、今日、芸術には支配的な権力構造に抵抗する力を發揮して、価値に対する姿勢を構築し、より自由な生のあり様を具体化し、市場とは別の世界があることを示唆する責務が課せられています。

自分自身が疑問を抱いているものを振興するという逆説的な課題は近代の文化政策のみが負っているものではありません。不和の法則を目見るものにし、効果を發揮させること、それが文化政策の最も大事な課題なのです。

さて、次の話題に移ります。欧州文化都市ないしは首都の事業の話です。

この事業はギリシアの女性文化大臣メリナ・メルクーリの発案です。アテネの旧市街地プラカでの夕食の席上で、かなり強いウソというアニスのシュナップスをたくさん飲んでいたらしいのですが、当時のEU加盟国の文化担当大臣たちが、欧洲経済共同体の中で自分たちにはお金もなければ事業も実施できない、ということに気づいて、文化都市という事業をしてみようというアイディアが生まれたそうです。文化についてはいざれにせよブリュッセルの欧洲評議会の担当下にありました。欧洲評議会は、1954年から欧洲全体をテーマにした国際展覧会に成功していました。欧洲閣僚理事会と欧洲評議会というのはドイツでも非常に誤解されやすく、その区別がなかなかできないということを踏まえてお話しします。欧洲議会が欧洲評議会のすぐ近くにあるということも一層混乱を深めているのですが、欧洲評議会はEUの閣僚理事会、欧洲理事会とは全く別の課題を持つものであります。このふたつの役割を区別して理解しない限り、様々な政策の問題を理解することはできないと思います。

先ほどの食事会の話ですが、ここで欧洲文化都市を宣言するアイディアが生まれ、アテネを欧洲文化都市であると宣言しました。アテネは欧洲のイデンティティー発祥の4つの都市のひとつですから、ものの分かる人たちならば誰も異議を唱えなかつたわけです。アテネは哲学、エルサレムはユダヤ教とキリスト教、ローマは法、ビザンツは帝国の代名詞となっています。「文化都市」という標語それ自体は、まだなんらの意味も持っていないません。昔から存在したものに新しい標語を貼り付けただけです。欧洲評議会の展覧会に対抗する一種のマーケティングのようなものだったのです。

結論はどうあれ、この構想は成功しました。1986年はフィレンツエ、1987年はアムステルダムと2つの芸術の生産と芸術の収集に優れた都市が選ばれました。それによって質の高い文化年というものは習慣となりました。1985年以来、文化担当者の集まる欧洲理事会は毎年、少なくとも1つの欧洲文化都市を宣言してきました。1990年には首都でもなく、しかも難しい状況にある町グラスゴーが欧洲文化都市に選ばれました。ここにすべての都市のリストがあります。

- 1985年:アテネ(ギリシア)
- 1986年:フィレンツエ(イタリア)
- 1987年:アムステルダム(オランダ)
- 1988年:ベルリン(ドイツ)
- 1989年:パリ(フランス)
- 1990年:グラスゴー(イギリス)
- 1991年:ダブリン(アイルランド)
- 1992年:マドリード(スペイン)
- 1993年:アントワープ(ベルギー)
- 1994年:リスボン(ポルトガル)
- 1995年:ルクセンブルク(ルクセンブルク)
- 1996年:コペンハーゲン(デンマーク)

1997年:テサロニケ(ギリシア)  
1998年:ストックホルム(スエーデン)  
1999年:ワイマール(ドイツ)  
2000年:アビニヨン(フランス)、ベルゲン(ノルウェー)、ボローニャ(イタリア)ブリュッセル(ベルギー)、ヘルシンキ(フィンランド)、クレーゲフ(ポーランド)、ブラハ(チェコ)、レイキャビク(アイスランド)、サンチャゴ・デ・コンポステラ(スペイン)  
2001年:ボルト(ボルトガル) - ロッテルダム(オランダ)  
2002年:サラマンサ(スペイン) - ブリュージュ(ベルギー)  
2003年:グラーツ(オーストリア)  
2004年:リール(フランス) - ジエノヴァ(イタリア)

スティーブ・オースティンが、各地域での役割に適したタイトルをつけることで、その文化都市の特徴を明確に打ち出すということを言いました。つまり、選ばれた都市は自らの力で文化年の様々な事業を繰り広げることになったわけでございますが、こうした活動の中で欧州には多様な文化的アイデンティティーがあることを示すべきであるとオースティンは言っております。こうした文化都市の事業というのはすでに知られていて高いけれども優れているというものをお金で買って、ただ示すだけであるという批判もできました。

そうした中、1999年にドイツがEU議長国であったときに、欧州共同体条約の第151条に基づいて新しい手続きを導入し、欧州文化都市は欧州文化首都に名を改めました。持ち回り方式で、加盟各国が決まった年にひとつ、あるいは複数の文化首都を推薦でき、場合によっては、優先順位をつけることもできるというものでした。このようなことが1999年に決定されました。それ以前は都市のマーケティングという性格でしたが、以降、文化政策という性格を強めることになりました。評価基準は次のような内容が検証されたのですが、全体としていえば、都市開発の要素としての文化という観点が重視されたということです。

2010年がドイツの順番になるのですが、立候補したのはアウグスブルク、パンベルク、ブラウンシュヴァイク、ブレーメン、エッセンおよびルール地方、ゲルリッツ、ハレ、カールスルーエ、カッセル、ケルン、リューベック、ミュンスター、オスナブルック、ポツダム、レーゲンスブルク、ヴィッテンベルクと9つの州から16の都市が名乗りを上げ、非常に激しい競争となりました。その中から州の間で調整が図られて、ブラウンシュヴァイク、ブレーメン、エッセンおよびルール地方、ゲルリッツ、ハレ、カールスルーエ、カッセル、リューベック、ポツダム、レーゲンスブルクと10都市が残りました。これらの都市はドイツの地方文化を十分に横断的に代表しているといえます。詳細については触れませんが、ドイツの地域の多様性というものを十分に反映していると思います。

ここで審査委員会を設立いたしまして、ブリュッセルに対して候補地を挙げるために、2つの町に集中していくわけありますけれども、今から1年半前にその最終な決定が下されました。様々な評価基準に基づき、エッセンとゲルリッツが選ばされました。工業の中での都市化のプロセスにおいて、様々な生活の形式、形態を見せているということがその理由でした。この新しい段階でこうした多様性をみせているということがエッセンとゲルリッツが選ばれた理由です。長らくの分断と対立、人々を故郷から追うといったことがあったヨーロッパが再び統一するための象徴となるべきであるということで選ばれたわけです。

ではゲルリッツの町を紹介させていただきますが、ヨーロッパの人々の和解を象徴する町となっております。先ほど狼が吼えるようなところでありますといいましたが、フリー・ステート・ザクセンの一番東側の国境に位置します。欧州文化首都に立候補することによって、町の知名度が非常に高まりました。非常に有名なカールスルーエやレーゲンスブルクを退けて、ドイツ国内の2つの都市のひとつにえらばれたのです。この結果がヨーロッパの次元に対して、つまりブリュッセル、欧州議会に対してドイツの正式な提案として出されるわけです。2006年の4月11日に最終的な結論がでまして、エッセンが鼻の差でゲルリッツより上位、第一位に指名されています。審査結果はちょうど二週間前11月13日にブリュッセル側でも承認をされています。

委員会としてはエッセンにせざるを得なかったということがあります。それはブロイセンの学術的な伝統と関係があります。ブラウンシュヴァイク、ブレーメン、エッセン、ゲルリッツ、ハレ、カールスルーエ、カッセル、リューベック、ポツダム、レーゲンスブルクなどがこの候補でしたが、第一位がルール地方ということに、つまりエッセンになったのです。これはヨーロッパの審査委員会であります。グーグル・アースを使ってEUの地理的な中心を確認してみると、リールとアミアンの間です。エッセンがやはりゲルリッツよりはるかにここに近いということが最終的な決断の背景にあります。まあこれは冗談と理解していただいてもいいんですけども、客観的に見ますと、ゲルリッツは町の持っている橋渡しの役割に大きな特徴があるのですが、

2005年の段階で2004年には新たな10カ国を受け入れるという決断をしたわけでありまして、2019年までの間には新しい国にその順番が回ってこなければいけないわけで、毎年西と東との間の橋渡しという側面がとりあげられなければならない。2010年はドイツとハンガリーとの間の橋渡しということに注意を向けなければならないということになり、ゲルリッツはドイツとポーランドの間にある都市であるので、2010年にゲルリッツを選ぶことはできなかったというのがもうひとつの背景であります。エッセンとペーテとイスタンブルが共同で欧州文化首都になるわけでありますが、この3つ、他方には大きな町がありますので、その釣り合いということもあります。ということでエッセンになったのです。

この立候補の過程は2000-2005年間にあったわけですが、ドイツの地方自治体の文化政策の歴史的な動きであったといえます。各自治体が非常に活発に様々な動きをみせたわけです。ブランデンブルク門の脇に立候補した都市がポスター展を共同で行いました。もちろん競争はしていたのですが、一緒にこうしたアクションを起こしたわけです。それから各地域、自治体の枠を超えた協力が行われました。かなり離れた自治体間でも協力関係が生まれました。こうしたプロセスの結果として、10の自治体では、文化政策を自治体の役割の中心にすえよう、ということが言われ、すでに決定もされております。2010年の欧州文化首都立候補におけるその大きな動きというのが、ドイツの地域の文化政策に活気的な影響を与えたということになります。2000年に立候補が始まり、2006年のはじめに最終決断が下されましたか、このプロセスの中で文化政策がやはり不和の法則に基づく政治の分野であるということが明らかになったわけあります。ゲルリッツにいる人間にとっても効果の表れ方にいろいろな差があるという中で、長期的な都市開発の手段として使っていかなければならぬということになります。次にゲルリツツ-ツゴルジェレツの町自体のお話に移っていきたいと思います。

今、欧州文化首都の紹介をしたわけですが、ゲルリツツは立候補しました。その背景になにがあるのかということですが、「名前は予兆であれかし」というのは古くはゲルリツツ・イホルジェレツといわれた現在のゲルリツツにも当てはまるわけです。1071年ハインリッヒ4世の時代に初めて歴史に登場するラテン語のGorelicaという名前は、町の歴史に重要な3つの言語に共通の枠を与えています。ナイセ川の西にあるゲルリツツはドイツ法の社会で、ナイセ川東の岸にあるツゴルジェレツはポーランドの法律に基づく自治体です、さらに、ボヘミア文化のヴァーチャルな社会、それに対するチェコ語の名称ソルジエレツを加えるべきだと思います。というのもこの町は歴史の理解では長い間、ボヘミア王国の領地だったからです。ソルブ語のソルケレツにはボヘミアの発音がまだ残っています。ですからこのゲルリツツ-ツゴルジェレツは三重の意味で火事場のようなものであります。ひとつには今日の社会状況がどちらの町も、若者、知識階級、女性が離れているという共通の現象を見せていることがあります。1989年以降の政治、経済、文化という三重の体制変化は、ポーランド側よりもむしろドイツ側により深刻な影響を及ぼしました。

西側では統計的な失業率は24%ですが、実際には50%近くだと思います。たとえば自分の住んでいる町の統計上の失業率は20%で、実際は50%の失業であるということを想像してみてください。これは非常に深刻な問題です。青少年の中で、まったく社会性を身につけられない人々の割合が、20%に上ると推定されています。こういった人たちちはまともに職を身につけられると思われていません。日本でも同じような現象があると聞いています。プレカリアートという新しい表現がドイツ語にありますが、もともとフランス語から来ており、プロレタリアートという言葉のもじりで、こういった全く社会に統合できないような人々のことを言っているわけあります。実際にはこの20%よりもっと大きい数字かも知れません。

ゲルリツツそしてツゴルジェレツの二つの町では移住者の第一、第二、第三世代が住民の3分の2を占めており、旧住民は31%にすぎません。彼らの出身地は広範に渡り、今日のウクライナからエーベ海を経て西ヨーロッパにまで彼らの出身地を遡れます。こういった背景から、ゲルリツツ-ツゴルジェレツにおける多くの移民と全く異なる文化共生を背景とする人たちが、未来のヨーロッパを先取りしているということも納得できるのです。

一方、歴史的な意味でも、この町は、ゲルリツツの名の由来となった単語の本来の意味、火事場であります。町の歴史は中部ヨーロッパにはよくあることなのですが、経済、人口、政治が規則的に発展と衰退を繰り返しています。カタストロフィーの度に火事場が残されて、そこから町は立ち直ってきたわけで、ベストやフス戦争のあとには即座に、30年戦争、ナポレオン戦争、第一次大戦のあとにはその再建はやや長くかかりましたが、常に立ち直っていました。1500年頃にはゲルリツツは帝国の中のもっとも豊かな50の都市の1つでした。1526年以降は現在のドイツで最初のルネサンス都市でした。そのため、今町の西部、ゲルリツツと呼ばれる地域には、修復された3600もの記念建造物があって、芸術史研究者たちはドイツ、そして広く中部ヨーロッパにおける最も美しい都市のひとつだとしています。

ヘレニズムの伝えで、周期的に焼け死に、その灰からより美しい輝きを伴って蘇る不死鳥、フェニックスをこの町の興亡の歴史の象徴にすることも出来ると思います。中世の紋章でフェニックスは赤と金で描かれています。市の紋章もそうなっています。皇帝ジギスムントが1433年、町に授与した高価な紋章も同様の色合いで、左の皇帝の双頭の鷲の下は金色の

ベース、右のボヘミア王の獅子の下地は赤でした。尾があたつに分かれていますが、ひとつはボヘミア、もうひとつはルクセンブルクを意味しています。王冠は、帝国の王冠でありボヘミア王のものではなく、神聖ローマ帝国の王冠で、十字架はキリスト教を示しています。オットー大帝の帝国カロリング朝の鷲が聖靈の鷲から発展したという新しい理論が正しいならば、この紋章には金の靈と赤い権力との間の弁証法が表れていて、帝国の恩恵の庇護のもとに主張されているといえます。

1990年9月のドイツ再統一への承認、1990年のドイツ・ポーランドおよび1992年のドイツ・チェコスロバキア間の協定、ならびに2004年5月の東方への第四次EU拡大により、ドイツと東の隣国ポーランドとチェコとの間には共通のヨーロッパの家で良き近隣関係を再出発させる歴史的なチャレンジが拓けました。目指された方向と都市政策のいわば「プロジェクト・フェニックス」はゲルリッツ・ツゴルジェレツを欧州統合のテスト・ケースとして捉え、地域レベルでポスト戦後の体制を確立していくということになったのです。

ここでごらんいただきますのは、ドイツとポーランドの国境で、その間にあるのがナイセ川です。そのほとりに茂っているのが葦で、国境の柵を覆い隠してしまう。したがって人間はこういった障害なしに行き来ができるということになります。1945年の5月7日、終戦直前にナチが7つの橋を全部破壊してしまいました。その後ひとつだけ橋が作られたのですが、これはサラマンカ出身のスペインの芸術家の作品で『懸け橋』という作品です。この下に見えるのが新しい歩道橋で、奥がポーランド、そして手前のドイツとの間で人と人をむすびつける懸け橋になっている。こちらにありますのが、ファラーデンミューレ、反対側がドライラーデンミューレというレストランなのですが、橋ができます前から、2つのレストランが川を挟んで搬送装置を用意し、お互いのメニューを出し合えるよう協力していました。これはゲルリッツの市庁舎とズゴジェレツの市役所です。こちらがポーランド側の町です。2030年に行政分野における広域連合を発足させる計画で、青がドイツ、黄色がポーランドです。このふたつの自治体が共同で広域連合をつくろうというのは画期的な出来事です。

ドイツにおいては国家があたつの次元に別れ、ひとつは州レベルで、もともとは各諸侯が支配していた国、とした16の領邦国家が現在の州になっているのですが、防衛、外交政策については連邦、すなわち国のレベルに権限を委譲しました。文化、教育については各州が国家として権限を維持したわけです。いわば16の州が集まって連邦というレベルの国を作業共同体として作っていました。ですから、ドイツの国家というのはあたつのレベルがあります。そのあたつの国のレベルとはもうひとつ独立したレベルが地方自治です。自治体の中では地域の市民に関わる問題については自らの権限に基づいて管理をする権利、自治権をもっています。自治権の中には他の自治体と協力をする権限も含まれています。ですから自治体が連合体をつくることも可能です。自治体は、国レベルとは全く無関係です。これはよく誤解されることなのですが、国、ステートというのは、ステート・オペラですか、そういう形で国が事業をしています。一方で市、シティも公共的な事業を実施しています。それらをあわせて公と言っているわけです。こういった公の分野で民主主義が生まれているわけです。アテネは隣のスバルタとは敵同士でしたが、今ドイツでは自治体というのは、一番上に連邦という国があり、その次に州という国があり、その下のレベルで完全に自治権を持つ行政組織であるのです。

いずれにしてもドイツの民主主義というのはゲルリッツという基盤の上に築かれたといっていいかもしれません。ドイツの帝国議事堂というのは、ゲルリッツの近くから採れる花崗岩、御影石の上に作られています。これは耐圧特性が非常に優れています、1平方ミリメートルで400ニュートンもの力を支えるといわれています。もちろんガリバルディというイタリアの石はもっと強いのですが、それ以外ではゲルリッツの花崗岩が非常に強固で、その上に帝国議会が作られたということを考えると、ドイツの民主主義がゲルリッツの上に築かれたといっても、それは過言ではないでしょう。

ドイツ、ポーランドの二つの国にまたがる形で、ゲルリッツとツゴルジェレツが今あるのですが、この二重の町が将来はひとつの広域連合を作るとなった場合に、新しい町の行政の言語はドイツ語にするのかポーランド語にするのかといったことは、やはり非常に大きな問題です。民族大移動の時代からこの地域には人が住んでおり、800年ごろにはスラブ人、後に12世紀にはドイツ人が住むようになりました、次々と色々な民族がそこに住んでいたわけです。町は徐々に発達し、18世紀には工業化し、19世紀には8万の人口を数えるまでになりました。1939年5月の国勢調査では93,000人を越え、この町の最大の人口を数えております。1945年の終戦直後には一時的にではありますが、難民が集中しまして、都市部近郊に150,000人がひしめいたという時期がありますが、それは例外であります。

これが町の新しい紋章です。過去とは全くかかわりなく、50年代のスタイルで新しくデザインされました。15世紀以降のゲルリッツの町の伝統を反映しております。町の東側の部分、ポーランド側になってしまった部分については全く無視をしていました。ツゴルジェレツ、ポーランド側の町は、殆どが新しく移り住んだ人たちで、3分の1ずつ、ポーランドの旧東部の地域、中部ポーランド、マケドニア出身であるということで、スラブ系のギリシア人はすでに40年代後半にここに定住していましたということです。第一次大戦の頃にはすでに、ギリシアの傭兵部隊が自主的に捕虜になったという経緯もございます。

このようにそれぞれの出身地の文化が非常に多岐にわたっています。ですから、この町では元々住んでいる人の割合というのは非常に少なく、ゲルリツでは60%に過ぎません。ゲルリツに新しく移住してきた人たちの大部分は、シュレジア地方からやってきて、ボヘミア、東プロイセン、バルト諸国などから来た人もいます。東独時代に政治的な理由から国境地域への強制移住で、あるいは職業上の都合でやってきた人たちもいます、統一後にやって来た人もいます。日本の方にも興味深いと思いますが、大変美しい町なので、年金生活者が住む町として知られるようになりました。町は大変美しく、生活費も安いということで、現在そういった動きが実際にあります。

実際どのような文化政策をこの火事場であるゲルリツツゴルジェレツが必要としているのか。私の講演の最後の部分に入ります。

先ほどヘラクレitusの「万物の生成は争いである」ということを引用しました。もしそうであれば我々にとっての欧州都市ゲルリツツゴルジェレツは政治のための格好の場所でしょう。例えば日本で次のようなことを想像してみてください。もし日本の国の一端で、もう1000年以上も日本の中核地であった地域が、戦争によって別の国に割譲されるということがあつたら、例えば隣国の韓国に割譲されたと想像してみてください。今までずっと日本であったところの町、地域の真ん中に国境線が引かれ、一方は日本、一方は韓国になったと想像してみてください。そういう町が突然現われたとしたら?この町の両側は50年に渡って交流することもできなかつたらどうでしょう?そして両国の政府が戦争について、追放について語ることを禁じていたとしたら?そして50年経って国境が開かれ、協力関係が政治、経済、文化など様々な分野で可能になったとしたらどうなるでしょうか?

そうなると長期的な形で両サイトが新しい都市を形成することを考えなければなりません。このような状況が今まさにゲルリツツゴルジェレツがおかれている状況なのです。それまで分かたれていた町が、ドイツ側、ポーランド側に分かれていた町が、突然ひとつになるわけです。それまで50年間に渡って交流のなかつた町が、戦争についても、追放についても語ることの許されてこなかつた両都市の人々が、新たなヨーロッパという枠組みの中で手を取り合わなければならなくなつたわけです。しかしまつと前の世代に遡ってみると、ドイツとポーランドの間には常に緊張関係があつたわけです。このような緊張関係というのは持続します。歴史の息吹というのは多分日本と韓国の間でもそうでしょうし、ドイツとポーランドとの関係でもそうであるように、常に何らかの形で残り続けます。しかし誰かが第一歩を踏み出すのです。和解のための、協力関係の第一歩です。そのためには実際そこに一緒に住んでいる人たちが手を取り合って、第一歩を踏み出さなければなりません。例えば子どもたちの世代です。私の娘は今ポーランド語を習っています。同じようにポーランド人の子どもたちがドイツ語を学んでいます。こうして子どもたちがお互いの言語を学ぶということも文化政策の一部なのです。

ではゲルリツの文化政策の前提条件とはどのようなものでしょうか。ゲルリツは分断された都市です。ですからそれぞれの経済活動の半径は180度という限られた範囲になります。それはインフラの整備もそうですけれども、もちろん今のようなグローバル化した時代に、どの都市も360度という半径を持つ中にあって、このようなことが長く続くわけがありません。都市というのは人によってなりたっているものです。経済界の分野で観察をしてみると、雇用を与える側は、実は、雇用を受けている側だということが分かります。雇用を受け取っている人という風に被用者のことをドイツ語では言いますが、彼らは労働力を与えている側、ということになります。このように、ある町においても人材が経済力の生産性を保障する源であり、また人々の生活の質の源にもなるのです。したがってある都市というのはその市民なくしては決して成り立たないものなのです。ある都市で分断された50年の間互いに語ることのなかつた人々がいるということを考えてみてください。そしてそのそれぞれの側でもいくつかのグループに分かれていたようなゲルリツツゴルジェレツにおいては都市政策の最優先課題に挙げられるのは、まずこういったグループを互いに対話するようにしなければならない、同じテーブルについて話をする、少なくともまずは接点を持つということからスタートしなければならない。これもまた文化政策においても同じことが当てはまるでしょう。

したがって両都市の行政において、コーディネートを引き受ける評議会が立ち上げされました。先ほど申し上げたように両極端なものの間を仲介するようなものがあれば、対話が進みやすいということです。例えば京都大学の方と東京大学の方が、日本ではありません接点がないとしてもこのふたりがヨーロッパに行くと、二人とも同じ日本の大学の人である、と同じグループに属することになります。同じことがこのゲルリツツゴルジェレツについてもいえるのです。ゲルリツツゴルジェレツだけではふたつの分かたれた都市ですけれども、そこに第三者が入ることによって、両方がひとつの町になりうるということです。

また対外的には、この町の知名度を上げる、あるいはそもそも知られるようにするということが大変重要です。プラスのイ

メッセージを持ってもらわなければなりません。こうした背景があるからこそ、ゲルリッツツゴルジェレツでは市の予算の11%をも文化に割いております。これはドイツでもトップレベルの文化予算で、フランクフルトに次いで高い予算となっております。皆様の住んでいるそれぞれの都市の文化予算が、市の予算のどれくらいの割合かということを考えてみてください。ゲルリッツという大変小さな町であるにもかかわらず、ここでは11%もが文化予算に割かれているのです。それはゲルリッツツゴルジェレツの将来のためにこの文化予算が必要であるとの認識による額であるといえましょう。

しかし例え、ポーランド側の住民がドイツ側の劇場にいった場合、その分の援助というのは、実はドイツ側の財政から出ているという非均衡、バランスの悪さも指摘しておく必要があります。欧洲文化首都に応募したときには、そこには非常に重要な選定条件がありました。こうした背景があったからこそ、ドイツの中でもゲルリッツの文化担当の方が、真っ先に2000年の秋には応募条件などを勉強しておられたということを指摘しておきたいと思います。ドイツの中で最初に立候補を決めたのも、実際にゲルリッツでした。300万ユーロという予算を組んで、ゲルリッツは応募をしたわけです。これはドイツの中でも最も高い予算でした。その後、ザクセン州からも小額ではありますが援助があり、またそれを上回る多くのスポンサーが支援を申し出ました。ゲルリッツが欧洲文化首都に応募したというのは、この地域の文化を重視した結果に他なりません。そして長期的な都市の発展のためには隣国ポーランドとの間に横たわる深い溝を克服しなければならないということを誰もが認識していたからに他なりません。

ゲルリッツ・ツゴルジェレツという両都市のレベルでは1998年5月に「ゲルリッツ・ツゴルジェレツ・欧洲の都市」という宣言をしております。1998年以降、欧洲デーに毎年、必ず両市議会が合同で会議を設けております。

〈資料：ゲルリッツ人口推移〉

| 住民          | ゲルリッツ 全体 | ゲルリッツ西 | ゲルリッツ東     |
|-------------|----------|--------|------------|
| 1415        | 7,800    | 8%     |            |
| 1500        | 8,000    | 9%     |            |
| 1641        | 5,000    | 5%     |            |
| 1717        | 5,500    | 6%     |            |
| 1781        | 7,600    | 8%     |            |
| 1815        | 8,785    | 9%     |            |
| 1855        | 23,326   | 25%    |            |
| 1871        | 42,200   | 45%    |            |
| 1900        | 80,931   | 86%    |            |
| 1919        | 80,362   | 86%    |            |
| 39年 5月      | 93,823   | 100%   |            |
| 1945 / 1946 | 78,844   | 84%    | 5,261 6%   |
| 1950 / 1950 | 113,709  | 121%   | 13,562 14% |
| 1960 / 1960 | 105,946  | 113%   | 16,037 17% |
| 1971 / 1970 | 115,964  | 124%   | 28,472 30% |
| 1981 / 1981 | 114,599  | 122%   | 33,768 36% |
| 1989 / 1989 | 110,640  | 118%   | 35,874 38% |
| 1995 / 1995 | 102,564  | 109%   | 36,446 39% |
| 2000 / 2000 | 97,260   | 104%   | 35,661 38% |
| 2005 / 2005 | 91,688   | 98%    | 34,059 36% |

今ご覧いているのが、ゲルリッツの人口の推移です、非常に歴史的なところから遡っていますけれども、1500年には8000人ほどの人が住んでいて、当時のドレスデンを上回る人が住んでいました。このように継続的に人口が増えています。もちろん間には戦争があったりベストが流走ったりというようなことがありましたけれども、基本的には継続的に増えてきました。8700人というプロイセンの時代ですね、それから工業化が進む中で3万2000人という風にどんどん増えていき、8万人を超えていきます。現在ゲルリッツといわれているゲルリッツ西とツゴルジェレツである東側に別れていきますけれども、このときの人口をあわせてみていきましょう。ゲルリッツ東では3万5000人、今では3万4000人ですけれども、ここで

も継続的に人口は増加しています。そして11万人というふうにピークに達したこともありましたけれども、ここ15年間はすこしずつ減っていって、9万1000人くらいになっています。合計では1939年と大体同じ規模の人口になっているということです。

さて、2010年、ゲルリツツツゴルジェレツは欧州文化都市に立候補しました、「我々は欧州の文化首都をつくる」というモットーの元に立候補したわけです。このプロセスですが、ほんのいくつかだけ触れたいと思います。これは応募のプロセスだけではなく、ゲルリツツツゴルジェレツという町が発展する中で自然に生まれてきた様々なものです。ひとつには、ゲルリツツツゴルジェレツ市が授与している「ブリュッケ賞(懸け橋賞)」というものがあります。有名なカール大賞と同じ時期に授与されています。それからナイセ劇場連盟というものがあります。ゲルリツツツゴルジェレツという二重都市の劇場が集まって劇場連盟を作っております。ゲルリツツ、リベレツツ、ツィッタウといった3つの国が参加する劇場連盟というのは、政治的、法律的またメンタルな意味でも、可能なのでしょうか?

ヨーロッパの歴史上、このような国を超えた形での劇場というものは存在しませんでした。なぜでしょうか?劇場というのはそれぞれの国の形に即したものであるからです。ゲルリツツツゴルジェレツだけがここで、トランシナショナルな、国を超えた形での、劇場連盟を作ろうというアイディアを持つにいたったということは注目に値します。こちらはゲルリツツのシュレジア美術館です。1526年の建物ですけれども、ルネサンス建築としてはドイツ最古のものにあたります。この美術館はつい先ごろ改修工事が終わり、シュレジア美術館となりました。追放と逃亡の歴史を扱う美術館です。こちらは国際アーツ・サマースクールです。ゲルリツツツゴルジェレツソルジエレツという3都市が参加して開催しているもので、若者が集まつて夏の間芸術についての様々なイベントやワークショップに参加するというものです。これは文化とマネージメントを対象にした欧州の大学ネットワークです。ナポリやサラマンカといった複数の都市がここに集結いたします。それから研究プロジェクトもあります。これはコレギウム・ポンテスという名前で、毎年夏、2006年からは日本からの若い学者も参加しています。メンタルな意味で国境を越えるとはどのようなことなのか、ということについて議論を戦わせる研究プロジェクトです。もうひとつのプロジェクトは「ヴィア・レギア」、王の道といわれる古の道です。フランクフルトやプラスマウ、キエフにまで至る道のり、そして南にいくとスペインにまでいたるという王の道、ヴィア・レギアも新しいプロジェクトです。

さてみなさま、結びに入ります。本日は欧州文化都市ゲルリツツツゴルジェレツを例に挙げて、文化政策についてお話しするという役割を与えられました。冒頭で文化の話以外に政治の話をいたしました。そしてヨーロッパで文化都市、文化首都というプロジェクトがどういう風に生まれたのかということをお話しました。そして次にゲルリツツツゴルジェレツという特定の例を挙げて、地域の文化政策の特定の条件についてお話しました。

ここでドイツの文化政策について連邦という枠組みの中で、少し分析を試みたいと思います。最初の藤野先生のお話の中で3つのキーワードをあげていただきました。文化分権主義、文化高権、補完原理です。州の文化高権というのは先ほどもお話しましたように各州に文化に関する権限があるということですけれども、これは遡れば16世紀の修道院などが国有化されたという改革の一端から発生したものです。それまで、高等教育というのは修道院などの管轄でしたけれども、各領邦国家の領主の仕事になったわけです。1918年以降はその後に続いた州の役割になったわけです。1871年にビスマルクがドイツ帝国を設立したときも、帝国という中央機関は教育や文化という領域に携わることはありませんでした。1998年に連邦レベルで文化担当大臣という職務が設けられましたけれども、この文化担当官は予算もなければ法的な権限も持っておりません。したがって、ドイツにおける文化政策というのはすべて州のレベルで営まれているわけです。ゲーテ・インスティテュートという協会がありますが、これは主に対外的に外交政策の一環として文化政策を営んでいるわけで、国内においてはすべて州のレベルで文化政策が行われているわけです。そして州の下に自治体レベルというのがあり、実はこの市町村のレベルというのが一番重要な役割を担っているわけです。ドイツで税金を払いますと、まずその税金は連邦にいき、連邦から下へと降りていきます。州に下りていき、残れば市町村にまで行きますが、大体州のレベルで止まってしまいます。スイスは逆で下から上へ税金が流れています、だからこそスイスというのは最も文化に優しい国であるといわれています。ですから次回は皆さんもスイスから学ぶこともたくさんあると思うので、スイスの代表の方を呼ぶことを提案したいと思います。

ドイツの約1万2000の市町村ですけれども、これらは相当額の予算を文化に割いているところもあります。しかし実際に一番多くの資金を芸術文化に提供しているのは教会関係、宗教関係の団体です。44億ユーロを1年間に支出しています。さてドイツには文化政策に携わる当事者というのは実際どのくらいいるのでしょうか。まず州が16あります。それから1万2000ほどの一般的な団体があり、2万9000ほどの教会関係の団体、全部で4万1000ほどの様々な団体が文化政

策に関わっていることになります。この表のコピーを皆さんにも後ほど配布いたします。この各団体はどれくらいお金を出しているのでしょうか。連邦は10億ユーロ、州は35億ユーロ、そして市町村が37億、教会の団体が一番多く43億になります。明日のフランスの方の講演でフランスがどのくらい文化に支出しているか明らかになるでしょう。ぜひここでドイツの金額と比較してみてください。この金額を割合に直してみると、連邦と各州で36%、すなわち3分の1ほど、市町村が29%、教会の信者が35%ということになります。これこそがキーワードとしてあがっている補完性の原則であります。つまりピラミッドでみると、底辺の部分が一番重要性を持っており、そこに加えて本当に必要な部分を上の部分が補っているということになります。

さて、本当にこれで終わりに入ります。長い間皆さんに辛抱していただき感謝申し上げます。ドイツが欧洲文化首都の公募に参加したというのは、どのような影響、文化連邦制にどのような意味をもたらしたのでしょうか？もう一度おさらいしておきますが、すべての16の州が応募したわけではありません。そうではなく、合計で10の都市で、全ての都市を代表しているわけではありません。もう一度10の都市を確認した方がいいでしょうか？大丈夫ですね。この10の都市をみんな参加させたなら2010年にはドイツの見本市のようになったに違いありません。しかしアンサンブルとして10の都市が全て参加するというのはEUが出している条件には合致しないのですね。1828年にゲーテがすでにウィーン、ベルリン、そして数多くの文化都市の名前を挙げて、それぞれが散らばっているからこそ、中央にないからこそ、その総体としてドイツという文化国家の全体像を決定付けているのだ、と言っています。したがって歴史的に見てもドイツというのは連邦制ということにも現われているように、非常に地域分権が進んでいるのです。ですから2010年に選ばれたのがひとつの町ではなくエッセンを含むルール地方であったというのは大変象徴的なことで、またとても幸運なことであったと思います。こうした地方の自治体の将来というのは、各自治体が手を取り合ってこそあるのだということを強調しておきます。これはドイツに限ったことではなく、日本にも当てはまるのではないでしょうか。ドイツの文化連邦制にとっては2000年から2006年に及ぶ応募の期間を考えても、各地方の強化に繋がったといえるでしょう。これは一般的なアンケート調査などでも明らかになっていることです。2010年に実際にルール地方エッセンが、文化の中心地として、世界におけるドイツのイメージを強化することに大きく寄与するに違いありません。この10の都市はそれぞれ素晴らしいポスターを作って応募したわけですが、2010年にはそれを集約した形で、連邦制を持つ文化国家ドイツを世界に向けて発信するのがエッセン、ルール地方なのであります。

長い間ご清聴ありがとうございました。後ほどの議論を楽しみにしております。